初にかりて、其跡の田地には蕎麥を蒔、小秬小菜を蒔て、九月末に取て、其跡へ早麥を作り、來年中田晩田をおこし、苗代にする粮料あてがふ、此早稻作る事、百姓の一の德也、此三度の作何もさほど闊敷なき時分々々仕付て、熟しけるも、其ごとくなるによつて、こなし時も女の隙有てよし、末の暇を奪はず、人手のつかゆるなし、如此早稻中田晩田段々順々に作出ざれば、男女闊敷事只一度にかさなり、手廻しよからず、然れば此早稻は戰場の足輕に似て、將棊にては歩兵のごとく、百姓の爲のみにもあらず、領主諸士百家の爲なり、米の稀なる時出來て、切目の專度を助け、其外考るに其利不可勝計、

〔耕稼春秋六〕石川郡稻名

早稻

やよ岡　彌六早稻　ちつこ松本共云　日の出　三浦　三納　かけ餅　須の谷　赤早稻

大唐早稻　示野　五々百餅　孫左衞門　雀餅　神子早稻　津輕　盆餅　ついなひき

川原早稻坊主早稻共云　引ずり　彌六餅へちば共云　羽ひろわさく共云　ぼつこり　ぼうず　新保　下林

江戸　遲早稻　早大唐

〔萬葉集十秋雜歌〕詠花

嬬嬬等、行相乃速稻乎、刈時、成來下、芽子花咲

〔袖中抄十九〕ゆきあひのわせ

顯昭云、ゆきあひのわせとは、ところの名をわせに讀つけたる也、萬葉歌に、

ゆきあひのさかのふもとにひらけたるさくらのはなを見せんこもがな

此歌にて心えあはするに、前のわせの名も、所につけたるときこゆる也、

〔萬葉集略解十下〕行あひのわせとは、夏と秋と行あふころみのる早稻をいふなるべし、